

# ヘーゲル『大論理学』研究 3

伊 藤 一 美\*

Über Hegels „Wissenschaft der Logik“ 3

Kazumi ITOH

## 第3編 度量 Das Maß

質の量的表現・量による質の表現が度量である。質と量とが合一されているものが度量である。

### 1. 特有の量 Die spezifische Quantität

#### A 特有の定量 Das spezifische Quantum

度量は定量であるのだが、定量一般ではなくある特定の質を表現している。それは、或るものの質をつくっている。こうした度量を直接的度量 ein unmittelbares Maß という。いわば登場したばかりで、未分化な度量だからである。「こうして度量は自己への直接的相等性へと還帰したその存在と一つになっている規定態、すなわち直接的規定態・質である<sup>(1)</sup>。」

ところで、直接的度量は質の量的表現だから一定の規定された大きさをもつ。たとえば金、銀、鉄など金属の比重がこれにあたる。また生物体の大きさとその肢体の大きさもそれにあたる。金属の比重は数多くある。より大きいもの、より小さいものとある。それらは、それぞれの質がもっている量的な質の表現であり、他のものとの関係から生じているものではない。それら自体からそうになっている。「無関心的な大きさ」gleichgültige Größeである。そのかぎりそれぞれが単なる大から小へとつらなる量でしかない。だが、そういった外的見方、見え方とは異なり、それぞれの量は質の表現だから特定の金属をも表現している。規定態である。規定されたものである。それ故「無関心的な大きさ」ではない。それを否定したものである。こうして直接的度量は二重の側面をもっていることになる。①

特有(特定)の質そのものの表現である。② 一般的な数量表現である。これをヘーゲルは「即自存在的なものとしての定量と外的・直接的なものとしての定量<sup>(2)</sup>」という。しかし、この二側面がばらばらにあるのではなく内的連関をもっている。外的な数量(外的定量)が質に関係なく増減するのをおしとどめ、そのようなことがないようにある質にはある量の表現が伴うようになっている。つまり、「度量は単一な内的量の規定態であって、この規定態は外的定量の変化を揚棄し、そしてこのことによって自己を即自存在的な規定態として立証し、かつ維持している<sup>(2)</sup>。」

かくして、度量は定量をして質を表現する量的なものとする尺度なのである。「定量の規則」Regelなのである。

#### B 規則 Die Regel

##### (1) 質的ならびに量的な大きさの規定態 Die qualitative und quantitative Größen Bestimmtheit

「規則は外的な大きさを規定する働きである<sup>(3)</sup>」。したがって規則は二つの契機からなっている。① 外的定量を規定するものとしての質的なものである、「本来的に規定された大きさ」die an sich bestimmte Größeであり、あるいは「大きさの規定態」Größenbestimmtheitである。② 外的大きさ、外面的定量、向他存在 das Seins-für-anderesである。この二契機からなる。といっても、ただ二契機が併存しているのではない。両者の関連はこうなっている。「外的な大きさ」は、外的なものなのだからその大きさはそれ自体で変化する。しかし、質の契機がそれを許さない。外的な大きさを質が特性をもって受け入れる。「或るものが度量である限り、その或るものの大きさの変化は……外的におこなわれる。しかし、或るものはその変化の

平成3年9月26日受理

\* 一般科

算術的な集合を受け入れない<sup>(3)</sup>。或るものはこの変化に反作用する。つまり外的変化を変化させ、この定量から他のものをつくりだし、こうして外面性における向自存在としての自己を示す。この結果、二つの定量が成立する。外的定量(外的集合)と特有化された(外的)定量とである。こういってもいい。同一の定量が内包的定量(特有化されたもの)として、そして外延的定量(外的定量)としてある。「同一の定量が一方では内包性の形式を、他方では外延性の形式をとって現存している<sup>(4)</sup>」。前者は後者に依存している。前者は可変的でもある。度量は比となる。比は比の指数をもつ。規則では、定量は一方では直接的大きさだが、他方では比の指数を通じた大きさとしてある。

## (2) 質と定量 *Qualität und Quantum*

規則は定量を直接的定量と特有化された定量との二重に規定している。これは質、つまり比の指数が直接的定量(外的定量)に否定的に関係することによって生みだされたものである。たとえば、特有化する定量の例として、温度が考えられる。外的温度は伝達されるとき比熱作用で特有化された温度として物体にとりこまれる。この特有化された温度はそれ自体熱量としては外的温度と等しい。しかも外的温度が一定でも物体によって特有化された温度は異なる。それ故この関係はひとつの質なのである。この質と定量とは特有化された定量によって相互に媒介され、両極となっている。特有化された定量が質的なものと量的なものという二契機をもっていることになる。そして合一している。このようにいうと質とは何か不変不動でそれ自体であるもののようにみえる。直接態、あるいは即自存在にすぎないようなものにみえる。しかしそうでない。規定された存在なのである。というのは、特有化された定量とは外的定量に対する比においてあるのだから、かの質は両者を否定する否定的契機である。それは指数である。こうして質は直接的存在であり、しかもこの直接的存在は定在をもつ。この定在は外的定量であり、しかもこの質によって規定されている量的なものである。こうして質が定量をもつものとなった。「だから質はそれ自身の最初の直接態と定量〔外的定量〕との否定的統一である<sup>(5)</sup>」。質はこのように外的定量(外的規定)を否定するものであり、それを通じて自己を量的にも現わしていくものである。つまり、外的規定の反作用をも否定する力を自己の内にもったものである。自己内存在である。同時に外的定量に規定を加える作用をもつ。外的なものを内化する作用をも

つ。自己のものとする。その意味で質は向自存在でもある。向自的に存在する或るものは質をもっている。規定態をもっている。規定態は性状であり、定量である。しかし、質は性状へとは移行しない。性状のなかで自己を維持し、ふみとどまる。だから性状は自己自身を揚棄して質となる定量である。この向自存在する質とは指数である。それは本性として度量を規定する。「この向自的に存在するものの本性はこの規則にあり、この規則が向自的に存在するものである<sup>(6)</sup>」。規則とは指数である。逆からいえば、指数は外的定量と特有化された定量という二契機をもっている。この指数・質が外的定量を特有化している。それ故、両者は単に量的な相異ではなく、共に質である。

## (3) 質としての両側面を区別すること *Unterscheidung beider Seiten als Qualitäten*

向自的に存在するものは二つの側面をもつ。一つは質的側面であり、もう一つは量的側面である。だが、質的側面は量的側面への関係においてのみであり、量的側面は質によって揚棄された定量である。この関係においては、量は一つの質である。たとえば、比熱の例を考えればよい。外的温度は空気という一つの質的なものの温度である。特有化された温度は、ある金属がその金属の熱容量にしたがってうけ入れた外的温度である。だから、外的温度は空気の質にしたがった温度だといえる。それ故、外的定量も一つの質なのである。そして、特有化されたものも質である。これら二つの質は度量を形成している。それらは度量のうちに概念的に把握されている。というのは ① ここでは、量的側面は、つまり外的温度も特有化された温度も質によって媒介されたものであり、質によって規定されている。② しかも、二つの質は比としてあるからである。二つの質が比としてあることによって量的関係も成立しているのである。だから、二つの質が度量を構成している。「したがっていまや、度量の関係のうちで相互に関係しているのは〔二つの〕質である<sup>(7)</sup>」。一方は算術級数的に増減する外的な集合数(外的定量)であり、他方は度量(指数)によって特有的に規定されている集合数である。しかし、二つの集合数は、つまり二つの質は相互に規定的である。度量に規定されてあるものである。一方は外延的なもの、外面性という規定をもち、他方は内包的なもの、自己内存在的なものという規定をもっている。というのは、外的定量と特有化された定量とは、ここでは同じ熱量の異なった数量的表現だからである。

### C 質の比 Verhältniß von Qualitäten

「度量は自己を規定して〔二つの〕質の比になった<sup>(8)</sup>」。その意味で二つの質はひとつの度量をもち、この度量の契機である。これらの質は度量を通じてのみ存在する。つまり、一方の質・特有化された定量は度量・指数による他方項・外的定量の商である。それは規定された直接態である。商という直接態である。商は「揚棄された度量」das aufgehobene Maßである。「というのは、度量は直接的定量を揚棄する運動を通じての媒介、この運動を通じての本来的に規定された存在だからである<sup>(9)</sup>」。だから、これらの質は「回復された直接的定量」das wiederhergestellte unmittelbare Quantumである。

ところで、この商という直接態、回復された直接的定量は、比の指数による外的定量の商である。このことが、あらためて質とは何かを、質の概念を完全にする。つまり、質とは指数のことであるが、それは「その両項が直接的定量と特有化された定量である比の指数として生じた<sup>(10)</sup>」。二つの質が一定の比率で関係するとき、そこに一個の新しい質が生じる。二つの質の関係は「一個の度量」となる。したがって、この質・度量・質は二つの側面をもつ。即自存在(特有の定量)と向他存在(直接的な定量・外的定量)とである。前者は、度量(質・指数)による後者の商である。だから、後者は無規定的な性状であり、前者は規定である。さらに、度量はここでは外的定量と特有の定量との正比の指数である。したがって、これら二つの質(外的定量と特有の定量)は比の項であるかぎり直接的定量である。このとき二項は二つの定量にすぎず、それらは他方に対する規定態のうちにそれらの直接態をもっている。

これらの定量はこの正比においてどのように規定されているかより詳しくみよう。この正比は二つの定量の互いに相手に対する度量規定であり、二つの定量はそれぞれ単位をもっている。だから、この度量規定・正比はあらゆる他の特有の規定においても変わらない。例えば、物体の落下では通過した空間は時間の自乗に比例する( $s=at^2$ )。この比は空間と時間との特有化された比であり、両者のべき相関である。しかし、相互に無関心(無関係)な質でもある空間と時間とは別の比、直接的な比をもつ。これは時間の最初の瞬間に対する空間の比である。しかも係数  $a$  は他の瞬間においても不変である。さらにこの  $a$  は、特有化する度量

によって規定されている集合数の単位である。しかも、この単位は直接的比の指数である。特有化する度量もこの単位を根底にもっている。「この直接態(単位)は特有化する度量が……直接的な比のもとでもっているところのものである<sup>(11)</sup>」。

さらに、特有化する比の働きは、外的定量を特有化することである。無規定な集合数は他の特有な定量(質化された定量)へと変えられる。ここにあるのは、集合数同志の比だが、その比においては指数は定量としては可変的である。だが、その指数は一つの質的に規定された指数である。というのは「集合数は単位の集合数であり、それらの集合数は度量の両項をなしている〔二つの〕質である<sup>(11)</sup>」からである。集合数と単位との関係としての定量は、初めには質である。「定量のべき化された実在的な質化は度量の比そのものである<sup>(11)</sup>」。しかし、それは単位の比に還元される。すなわち、二つの集合数は比において相互に規定された項である。しかもそれぞれ単位をもつ。この単位は集合数に属している。だから、単位も相手に対して互いに規定されている。つまり単位は度量をもつ。「したがって、それらの度量は単位としてのそれらの比であり、それだから特有化する比ではなく、直接的な正比である<sup>(12)</sup>」。それ故、特有化する比は正比へと還帰している。ここに現在しているこの「比は、根底に存しており、その指数が変化させられない最初の直接的な比である。この比の項はそれらの定量を変化させ、しかもまさに一方の項の変化は外的変化として算術級数[的な形]において進行するが、他方の項の変化は質的であり、特有化された定量の或る級数[という形をとって進行するの]である<sup>(12)</sup>」。だが、これらの二つの定量の単位はそれらの定量の集合数のこの変化には入らない。単位は直接的な比のうちにある。そして、この直接的な比に、変化する集合数を項とする比は還元される。

こうして次のことがいえる。特有化する比と直接的な比とが度量の(実在化された)契機となった。すなわち、度量は、一面では定量の直接態という側面をもっている。このことによって度量は、外的定量と特有化された定量という直接的定量とからなっており、それらの直接的な正比なのである。他面では、度量は特有化する比という質的な比を含んでいる。これは、度量の質的な規定である。というのは、特有化する比は単位の比に還元されたからである。また上述の直接的な比も、同様に単位の比に還元された。「度量はこの実在

化を通じて自己へと還帰しており、それぞれの他者において自己と等しくなっている<sup>(13)</sup>」。いまや度量の質的なものが外的定量に關しているのではなく、外的定量という側面そのものが度量なのである。そしてこの側面こそが根底に存する度量である。特有化する度量は質化された大きさとしてある。しかし、単位を媒介として正比に還元される。「単位は定量の絶対的に完全に規定されたものである<sup>(13)</sup>」。

度量はこうして質そのものである。質は即自存在と向他存在との統一である。だが今や、逆転して即自存在・規定とは度量の正比であり、向他存在、性状とは特有化する度量となっている。「二つの側面そのものが度量であり、したがって規定と性状とが本来的に同一であるということによって質は独立態になっている<sup>(13)</sup>」。

## 2. 独立した度量の比 Verhältniß selbstständiger Maße

### A 独立した度量の比 Das Verhältniß Selbstständiger Maße

#### (1) 中和態 Neutralität

ここでは度量と度量との関係が主題である。或るもの Etwas は、その度量によって独立的なものとなっている。この或るもの Etwas は諸々の他者と関係する。この関係においても独立的である。それ故に關係する他者としての外的定量を特有化する。これが Etwas の性状、あるいは向他存在(外面性)である。このかぎり Etwas は一つの質であり、質として他の質へと關係している。ここに一つの直接的比が出現している。それは特有の定量であり、真実には度量であり、比重に代表される。

この度量は他の度量へとかわり合う。つまり比較される。合金や化合物がこれにあたる。つまり、比の指数にしたがって關係し、そのなかに自己をおく。だが、この關係のなかでも指数は質的なものとしてある。ところで、この指数同志の關係だが、指数は規定された定量であり、量的な質であるから、外的定量に対して度量としてかわり、外的定量を特有化する。だが、逆に指数自身も定量であるから(他の指数からはそれ自身外的定量だから)この特有化する運動のなかで自己も同じく変化させられる。これが二つの項の中和 Neutralität である。「この關係の根底に存する両項の量的本質は相互に連続しあい、このことによって両項

の無關心な區別が定立され、そしてこの區別のなかに同時に両項がもつ質的规定が存することによって、この質的规定はまた変容され modificiren もするものである<sup>(14)</sup>」。度量は質を量的に表現しているのだから量は質的规定でもある。それが変わる。したがって、質的なものの統一が、ここでは或る質が他の質へと移行するのではなく、しかも両項が相互に揚棄しあい否定し合うというものでもない。「……両項は揚棄されてあることのなかで、自己をまた維持しもするということがここでは定立されている<sup>(15)</sup>」。

#### (2) 中和態の特有化 Specification der Neutralität

独立したものの基本度量は ① 定量であり、② この定量は指数であり、③ その変化は変容 modification である。この独立したものは多くのものと中和的結合をむすぶ。この結合はさまざまな比であり、この比はさまざまな異なる指数をもっている。それらは集合数の系列をつくる。このとき、独立したものは単位である。つまり、この独立をしたものは他の独立をしたものに対して特有のふるまいをし、指数の系列はこの特有のふるまいの系列である。

同様に他の一つの独立したものも、同じもろもろの他の独立をしたものとの關係をもつ。このとき、他の一つの独立をしたものも単位となり一つの異なった指数系列を形成する。

独立したものはこのように他の独立をしたものとの間でつくられる指数、ないしは集合数に対する単位である。だから、こういえる。独立したものは、その本来的に規定された存在をものもろもろの指数系列のうちに示す、と。したがって、この系列の諸項間の比がその独立したものの質的なものをなしている。したがって、同じ諸独立したものと異なる指数系列ではあれ指数系列をもつかぎりでは一つの独立したもの(X)と他の独立したもの(Y)とは、質的な同じものとなる。二つが區別されるのは、二つのものが互いに同じ諸々の独立をしたものと、異なる指数の系列をつくるということにおいてである。

したがって、二つの独立をしたもの(X,Y)か他の同じ独立した諸物との間で異なるとはいへ、ある指数の系列をもつとすれば、この系列は二つの独立したものの共通の単位となる。こうして、この共通の単位の中に二つの独立したものは比較可能となる。ということは、二つの独立したものと中和し、指数の系列をつくっていた諸々の独立したものが、それぞれが単位であるということである。このように特有の独立した

もの(X.Y)が、つまり単位であったものが外面的なものになっている。外面的であったもの、諸々の独立したものが単位となっている。ただし、質的なものが量的なものに、量的なものが質的なものになっている。このことは、実在的な度量、つまり特有の独立態においては質的なものと量的なものとは区別されているが、本当は両者が統一されていることを示している。対立している独立したものの中和は、それらの質的統一である。「両者が中和のなかで否定的に定立されている。……おのおのが中和において自己を無関心的に維持することでその否定もまた否定されている<sup>(16)</sup>」。中和において両者は相互に自己を否定し合いながら、その否定をも否定しあっている。自己を維持しあってもいい。「だから両者の質的統一は自立的に存在する排除的な統一である<sup>(16)</sup>」。ただし、異なる質の統一だからである。だが、この質的区別は量的なものとなっている。そのかぎり中和は無限である。このように、排除的でありかつ無限・無差別な親和性は選択的親和性 *Wohlvorwandtschaft* である。中和とは選択的親和性である。

### (3) 選択的親和性 *Wohlvorwandtschaft*

中和は選択的親和性である。特有の独立したものは、ここではその最初の性格を失っている。それは「向自存在的な否定的統一」*fürsichseiende negative Einheit* のなかにある。「この統一は、量的なものとの質的なものとの自己へと還帰した移行運動として、量的なものとの質的なものとの絶対的統一でもある<sup>(17)</sup>」。

だが、中和とは現存する独立したものが諸定量と関係することであり、そしてこれらの定量は、その定在を質化する否定のうちにもっている。だから、中和には区別がある。「現存しているものは比の直接的単位〔量的〕と特有化された単位〔質的〕との否定的関係であり、また量的なものとの質的なものとの質的な区別そのものである<sup>(18)</sup>」。中和とは区別における統一である。しかも、この区別によって直接的単位は定量そのものとして規定され、特有のものは質的なものとされている。

こうして、選択的親和性においては、二つの質的なものが量として自己を定在せしめ、量的結合が一つの質となっている。そして、より多いこと、より少ないことで、それは表わされる。ここに量的なものが質的なものへと移行する移行運動が存在している。しかし、この質的なものは量的結合でしかない。ただし、中和とは量と量との関係としてなされるからでもある。それ故、質（排除的）といってもこの限定的比例関係は

量的な面からの侵入をこおむるのである。こうして質的なものの量的なものへの、さらに質的なものへの移行運動がある。

## B 度量の諸比の結節線 *Knotenlinie von Maßverhältnissen*

度量の比は排除的・質的であり、そのことによって独立的であるのだが、それはより多い、より少ないということにもとづく。「より多いこと、より少ないことが排除的、質的なものである<sup>(19)</sup>」。だから、より多いとか、より少ないとかと規定するものこそ特有のもの、質である。このようにして量的なものが、むしろ質的なものとなる。

質的な比が量的な区別となることによって、一面では質的な比が量的な比のうちにあることになる。だが、量的なものは質的なものに無関心 (*gleichgültig*) である。しかし、質的なものによって量的なものが規定されている。これが両者の統一である。だが、他面ではこのことで質的な比が変化させられる。というのは、その比は量的なものから出来ているからだ。その他者だからだ。逆に量的なものは、特有の比(質的比)の基礎となっている。質的なものは、そこで自己を維持している。だが、そのことで、つまり量的なものは質的なものとの統一のなかで、それ自身同様に変化させられる。「だからして、両契機のおのおのが規定的なものとしてたち現われ、この規定的なものなかでは他方の契機は揚棄されたものとしてのみあり、またそれとともにおのおのの契機が揚棄されたものとしてありもするのである<sup>(19)</sup>」。

このように度量の比とは排除的なものとして、特有である。だが、この反撥する排除する運動は、一方では排除されたものへの関係であり、両者の相互牽引である。つまり、排除されたものが量的な契機である限り、排除するもの(質的なもの)は他者(量的なもの)から無関心的に区別されているが、排除するものは他者へと自己を連続させている。つまり、質的なものは量的なものをもってしか自己を表わさざるを得ないからである。しかし、この他者とはべつの量的なものなのである。質的なものは自己がいま関連している量的なものを排除し、他の量的なものに関連していく。ただし両者は本来相互牽引的であるからである。「それは、そのこの他在においてべつの比になり、またそれとともにべつの度量になるのである<sup>(20)</sup>」。それ故、度量はより多い。より少ない方向に変化していくものな



のである。

特有化する単位は質的なものであるから、度量であるところの数の比を規定する。だが、この数の比の項も、またその指数も集合数一般である。それ故、それは無規定的・外的なものである。一面では、度量はその比の項の量的変化のなかで不変のままである。しかし、他面では変化させられる。つまり、度量は質的には変わらないが、ただ外的な量として変わる。度量が移ってゆくのである。外的なもの、性状が変わるのである。しかし、これは度量の没落である。とともに、新たな度量が生じる。新たに登場したものも質的本性をもっているから、それもまた度量である。それは、外面性と性状に由来するのではなく、先行する度量と質的に関係しているが、それ自身本来的に規定された度量である。

したがって、二重のものが現存している。①「一つの度量からの他の度量への移行は外的・無連関的であり、一方は他方なしにおのおのが直接的な度量として現われる<sup>(21)</sup>」。それらはより多い、より少ないことで区別されている。両者の外的・無関心的比較が両者の関係である。②しかし、両者はその根底に規則を有せしめており、質的区別として相互にかかわっている。けれど、度量であるかぎり特有化されたものであるからだ。

したがって、独立した諸々の度量は量的にも質的にも相互に区別されており、相互に外的にも、規則によっても規定されており「より多いか、より少ないかという度盛にそって度量の結節線 Knotenlinie を形成している<sup>(21)</sup>」。つまり、度量の比が現存している。これは独立したもので他の質から区別されている。この定在は同時にものもろの定量の比にもとづいているので外面性と定量の変化をうけ入れる。このような定在はある幅をもっていて、その内部では変化に無関心的であり、その質も変らない。しかし量的な比が変化するある一点が出現して、その点上で質の変化がおこるようになる。ここに新しい質と新しい或るものである度量が出現する。べつの量的比が登場する。

先行する比はそれの他者、そのなかで没落する量的なものへと質的にかかわっている。そのかぎりでも最初の比の代りに現われた比も最初の比によって規定されている。しかし、新しいものは先行するものに無関心である。というのは、それらの区別は定量の外的区別だからである。それ故、新しいものは先行のものからではなく、直接に自己自身から現われ出たものである。

新しいものの出現は、このようにして無限に進む。しかし、この無限進行は新しい質の連続的な出現であるが、それは量的にはより多い、より少ないということによって区別されるにすぎない。だが、「質的な側面からみれば、自己自身のもとでのいかなる限界でもない漸次性のたんに量的な前進運動は絶対的に中断される。そして、新しく出現する質がその量的な区別そのもののゆえに消失する質に対して無規定的に他なる無関心的な質である。このことによって、移行は飛躍 ein Sprung である<sup>(22)</sup>」。

### C 没度量的なもの Das Maßlose

度量は直接的定量の外面性と無関心性を揚棄することによって自己でありうるものである。しかし、結節点として現われた独立態なる諸度量は量的区別に基づいており、度盛りを上下するものであった。それは定量のたんなる変化となり、没落し、没度量的なものとなった。こうもいえる。質的な比が量的な比へ移行するが、この量的比はいかなる否定の媒介もない。これは質的な変化ではない。また逆にこの量的な比、つまり比のこの無関心的な外面性はふたたび質化する。こうしたことが無限に進む。これは無限移行する無限性である。この悪無限的なものは、二つの契機の否定であるが、両契機ともに絶対的な規定が欠けている。だから悪無限性となるのである。否定といっても度盛りを上下する移行でしかない。飛躍でしかない。両契機の区別が消える否定でしかない。

しかし同時に、この無限性は両者の外にみいだされる無限性ではなく、両者のもとに定立された無限性である。ここに積極的な意味がある。質的無限性は此岸が彼岸のなかに直接移行した。それは此岸の消失である。有限がそのまま無限になる。量的無限性は彼岸へと定量が連続することであった。有限が無限としての自己自身をもつことであった。これにたいして度量の無限は質的無限と量的無限の統一である。総体性 Totalität である。これは、他者を自己の彼岸としてはもたない。ただ自己をこえて出てゆく否定のなかで自己に対立する他者を定立する。そういう総体性である。度量が自己に対立する他者をもったり、定立したりするものそのものではない。

もっといえばこうである。特有の比は二つの量の否定的統一である。それは独立して無関心的に成立している。しかし、特有の比が自己を特有化しているところのものは、量の諸規定である。そうすることでかえっ

て特有の比は量的な比へと移行しないで、量的な比のなかで自己自身と関係している。だから、没度量態、ないしは度量の否定、すなわち比の量的なものとは比の自己自身への否定的な関係でしかない。したがって、度量の無限性は度量が一つの他者であるということを揚棄する運動である。しかし、この揚棄する運動は度量が度量であるゆえんのものとして、度量の否定である。「したがって、特有の量の関係としての質的な比は、この否定を通じて自己を外的ならしめ、質を欠いた存在たらしめる。しかし、この度量の否定がまさに度量がよってもって度量であるゆえんのものであり、度量の特有の性状をつくりなしているものである<sup>(23)</sup>」。

ということは、度量・特有の比は自己を自己自身から突きはなし、自己をべつの特有の比にするということである。このとき、両者は相互に無関心的であり、質的關係もない。ただ両者は外的に区別される。だが、この区別は自己確立である。つまり他者との外的区別は量的なものでしかない自己の否定であり、それ故自己確立である。したがって、他者への関係は自己の区別されていないものへの関係であり、自己の否定としての自己自身への関係である<sup>(23)</sup>。」特有のものがなす自己からのこの反撥運動は、それが独立態となることである。「独立態は、ただ量的に区別されているにすぎないその他者へと、それが自己の否定においてそれがあるところのものであるように関係する、ということに成りたっている<sup>(23)</sup>。」ここに再び・量的な規定が特有の規定へとひっくり返っている。こうして量的なものはその他なる運動のなかで自己を維持し、自己の否定のなかで自己である。

したがって、無限進行とは特有の独立したものが量的なものへと移行し、そして後者が前者へと移行することである。「また新しい比がふたたび直接的な無関心的な比としてあることによってこの移行運動において移行運動が自己自身を揚棄することである<sup>(24)</sup>。」だが無限性そのものは質的なものと量的なものとの統一であるが、その統一とは自己から自己をつきはなす運動なのである。それ故、この移行運動は質と量との移行運動をこえたものである。この移行運動はそれらの統一という基盤の上でおこなわれている。おのおのはその他者へと移行するが、しかしこの他者がそれ自身のもとで自己を揚棄し、こうしてその他者に成る運動が、この移行運動である<sup>(25)</sup>。「したがって、おのおのが他者に成ることによって、それぞれがむしろ他者であるということを揚棄するにすぎない。こうしてそれぞ

れはその変化においてただ自己自身と合体するのである<sup>(25)</sup>。」したがって、特有の独立したものが移行するこの運動は、この運動自体を否定している。だから独立態は変化しない。ただ状態だけが変る。「移行するものは本来的に同一のものにとどまっている<sup>(26)</sup>。」ただ、特有の独立態は状態へとおしきげられている。契機となっている。

しかし、それら諸契機となった諸結節である独立態を貫通する、あるいは支える根底である真の独立態が出現している。つまり、状態へとおしきげられた諸独立態を契機とするものが出現している。けだし契機が出現しているのだから。それは、絶対的な独立態 absolute Selbstständigkeit である。「ここに現存しているものはその否定によって自己自身と媒介されている独立態である<sup>(27)</sup>。」

### 3. 本質の生成 Das Werden des Wesens

#### A 無差別 Die Indifferenz

特有の独立したものは、一度量的なものとなり、没度量に没落したが、それがまた質的なものだということになり自己を回復した。それは、否定によって自己自身と媒介された絶対的な独立態である。

はじめ、特有のものは直接的存在一般、つまり質的なものである。度量であるからそれは量的なものであることになる。量へと移行する。しかし量は質の表現である。そこで質的なものは自己へと還帰する。しかしこのとき量的なものと質的なものとは相互に移行しあっているだけにすぎない。区別がない。互いに他を規定していない。相互に無規定的なものにすぎない。だから両者が統一されているとはいっても質的区別をもったものの統一ではない。直接的統一である。つまり、両者が揚棄されたものとして一つであるような両者の統一ではない。換言すれば、この統一では質的なものと量的なものが相互に揚棄されていない。ただ、質的なものと量的なものが移行しあっているだけで、否定的統一というものがない。両者は一方が他者へ連続しているという意味で一であるにすぎない。「だから両者の統一は両者において統一に対して無関心的な統一、両者の無差別である<sup>(28)</sup>。」相互に自己を他者から区別し合っているという両者の統一ではなく、他者に無関心である。だから、質的なものと量的なものが、一方が他方へと移行しないで、ただ自己自身と合体しているというのが真実である。質的なものが同時

に量的なものであり、また逆でもあるといった統一ではない。その意味ではかの移行も移行ではない。それ故、この統一は即自存在的独立態である。絶対的否定態が欠けている。それ故、絶対的に独立したものではない。

## B その両要因の反比としての独立したもの Das Selbstständige als umgekehrte Verhältniß seiner Factoren

「無差別は質的なものと量的なものとの即自存在的な統一にすぎない<sup>(29)</sup>。」だが、無差別はそれの他者(差別)への規定された関係でもある。つまり、無差別は差別との関係性においてある。この点では無差別は直接的なものではなく媒介されている。というのは、無差別とは特有の独立態がそうではないということである。だから、無差別とは差別・独立態を否定的に媒介することで無差別となっている。無差別は特有の独立態とその否定というものからなっている。二契機からなっている。

こうもいえる。まず初めに特有の独立態という契機だけが現存している。その契機は質的なものである。この特有の独立態は無差別との関係においてあるものであり、無差別に対して規定されたものであり、それゆえ自己において区別されたものである。無差別が無差別であるためには、特有のもの否定、特有の独立態の否定がなければならない。だから、無差別があるためには特有の独立態とその否定とが存在しなければならない。こうして、二つの独立態があることになる。だが、この統一(無差別)では両者は潜在的に独立をしているにすぎない。相互に規定し合っていないからである。特有のものは規定されることによって、つまり否定されることにおいてのみ独立している。特有のものはそれとそれの否定という関係においてのみ独立的である。ここに否定されるものと否定するものがある。ということは「それらの特有の規定態においては、それらの一方は他方がそれでないところのものであり、そしてそのゆえにおのおのは同時に他方が存在する限りでのみ他方がそれでないところのものである<sup>(30)</sup>。」しかし、このような相互に他方に対して規定された差異をなしているのは量的な区別である。しかもそれが質的な区別を現わしている。だから、比の両項、定量は他方に対して質的なものとなっている。こうして、一方の存在は他方の非存在である。そういう関係において特有のものはある。これは反比 *umgekehrtes*

*Verhältniß* の関係である。ここでの反比は、以前に論じたような形式的な反比ではない。そこでは、両項が定量そのものであったから二つの項は無関心的ではなかった。しかし、ここでの反比は両項の固有の質的性格から生じている。両項が度量であるからだ。つまり、反比となるのは両項は相互に「他方が存在しない限り自己自身のもとにあるという排除する運動の契機を含んでいる<sup>(31)</sup>」からだ。だから「両項の自己へのこの還帰は自己への無関心的な関係、すなわち定量である<sup>(31)</sup>」ことになる。

それらは定量をたがいに他方にたいして無関心的に存在するという規定としてもっているわけだ。その点で定量は質的な関係をつくっている。こうして「この反比の両項は即自存在的な無差別のもとにそれらの独立態をもっている<sup>(31)</sup>。」統一そのものであるが、しかし差別を含む統一である。それらは特有化された独立したものである。だから、それらの統一とはそれらの否定あるいは他在によって媒介されたものとしてある統一である。おのおのは他方のもとにそれ自身への還帰をもっている。質的なものは量的なものにおいて本来的に規定され、量的なものは質的なものにおいて特有のものである。「それらがそのなかで独立したものであるこの否定的統一はその絶対的無差別からまだ区別されている。だから、否定的なものがその規定態において自己に向かいあって現われる<sup>(32)</sup>。」それ故それらの統一は両者の区別のうちに現存しており、両者は相互に反比のうちにある。

この実在的な反比は二つの特有の独立態からなっている。すでにのべたごとく、それらは本来的に同一であるのだが、ただ定量として区別されている。それ故、即自存在的な無差別は、それらの総計 *Summe* にすぎない。ひとつの規定された定量である。つまり、総計は無関心的な二つの定量の相互に入りこむ区別された比のもとにある。「両要因のこの規定態は、いまやそれらの定量のことになった比に存する<sup>(33)</sup>。」したがって、一方項は他方項が大きさをもちないかぎり大きさをもつ。一方の減少は、同じ量の他方項の増大である。「しかし、いまやそれらの量的性格が端的にこの質的な本性のものであるからして、おのおのは他方が到達するところまでしか到達しない<sup>(33)</sup>。」しかし、質的關係においては、両者は他方が存在する限りで存在しうる。だから、両者は量的には均衡のうちにあり、総計は変らない。「一方と他方だけが存在している。一方が増大するその限り、この増大は他方にはかならない<sup>(34)</sup>。」



しかし、ここにみられるのは反比の両項の根底に一つの規定的な全体が存在しているということである。変化もその全体そのもののもとでのみ生じている。それ故、変化は一つのもの、全体のうちにある。この全体こそ、本来的な無差別である。それは、質とか量とかではない。総計とか定量とか、その他の質的規定態でもない。それは絶対的否定態 absolute Negativität である。だから、即自存在的な無差別は完全に揚棄されてしまった。こうして両要因は本来的に同一であり、さらにそれらの規定された他在のうちにあることになった。このように「これらの要因がよって一つであるゆえんのもの、それらの否定的関係である<sup>(35)</sup>」

### C 本質が立ち現われる運動 Hervorgehen des Wesens

絶対的無差別とは、特有の独立態がそれがそうではないということだから、それは特有の独立したものと、その否定態とを前提としている。「絶対的無差別においては、この特有の独立したものは自己の否定によって自己自身と媒介されており、かつこの否定によって純化されて絶対的に独立したものである<sup>(36)</sup>。」つまり、即自存在的なものである。① 絶対的無差別が即自存在的なものであるということは、それが特有の独立したものとその否定という両契機から還帰して無差別となっているということであり、したがって無差別は両契機から区別されている。両契機は、この即自存在である無差別の性状、あるいは向他存在であるということになっている。② しかし、この規定態(即自存在としての絶対的無差別)は特有的独立態とその否定態という両要因の反比である。つまり、この規定態が絶対的に独立したもののもとに本質的にあるのだから、両要因は「この絶対的に独立したもののへのそれらの関係のなかでだけ考察されるべきである<sup>(36)</sup>。」両要因は統一の契機である。③ ここでは両要因の反比も揚棄されている。というのは、絶対的無差別の規定態とは自己自身への否定的関係だということが明らかになったからである。つまり、反比であるゆえにこの規定態は両要因の区別と相互否定とである。つまり、他者を否定することは自己を否定することである。そして自己になることである。けだし自己はいま他者に対して特有の独立態としてあり、他者はその否定としてあるから、つまり相互関係・反比関係にあるからである。「他者への否定的関係は……自己の規定を揚棄する運動、自己自

身へと移行する運動である。すなわち、否定的なものの否定である<sup>(37)</sup>。」

こうして次のことが明らかとなった。即自存在的な無差別があるのは、それをそうと規定しているもの、つまり無差別の規定態があるからであり、その規定態はそれの独立態の無限性、つまり絶対的否定態であることが明らかとなった。したがって、この規定するものの、規定態は絶対的独立態である。「この絶対的独立態は、そのそれに等しい否定態によって自己と媒介されているだけだ<sup>(38)</sup>。」それ故、次のことがいえる。① 即自存在的独立態・無差別は絶対的なものではない。それ自身が規定されており、その規定態は否定の否定である。したがって、この規定態とは向自存在的独立態である。そしてこの独立態がかの即自存在的独立態を契機として含んでいる。② したがって、次のような独立態が存在している。それは、独立態自身の完全な否定、つまり他在、すなわち最初の直接的なものの独立態において自己への単一な関係であり、だから同時に自己への否定的な関係であるという、そういった独立態である<sup>(38)</sup>。

① 存在はまずはじめに質である。質は規定された存在である。こうあるのも存在が他者の否定であるからだ。他者でない、ことだからである。

② 量は他者の否定ではなく、他者に無関心であり、無関心的規定態であり、他者は外的である。

③ 質と量とのもので質は量へ、量は質へと移行した。

④ 両者の統一が度量である。ここでは両者は関係し合っているが、相対的統一でしかない。つまり、この統一において両者は自己自身に対して無関心であり、自己へと崩壊する運動である。これは無差別の量的性格であるが、同時にその質的な性格でもある。すなわち、それは無差別でありつつも即自存在的、かつ直接的な独立態である。これが無差別の規定態である。だから、これは無差別の否定であり、無差別とは別の独立したものである。この二つの独立したものの相互否定的関係がそれらの質的規定態をつくる。だから、この質的規定態のなかでの無差別は定立されてもおり、揚棄されてもいる。この揚棄する運動は否定の否定であり、否定的無差別である。これが、規定態と無差別との統一である。

規定態と無差別との統一は、存在の真理を現わしている。この統一は単一な存在、無関心的直接態である。しかも、この単一な存在・直接性を否定し、つまり自

己を否定し、そのことを媒介にして自己となった単一な存在が、この統一である。つまり、この単一存在は自己の否定によって自己と合一している。「この端的に内化された存在としての存在が本質である。存在の真理態はこうして絶対的に揚棄された直接態として直接的なものであることである。本質は自己への否定的関係としてのみある<sup>(39)</sup>。」本質とは存在しながらそれがあるところのものでなく、かつそれがないところのものである存在<sup>(39)</sup>である。

(『第一書存在』終り)

### 注

- (1) ヘーゲル『大論理学』第1版寺沢訳(以文社)317頁, Hegel; „Wissenschaft der Logik“ (Erstausgabe, Wieland 版) S. 269, (以下同様)
- (2) 319 頁, S. 270
- (3) 320 頁, S. 272
- (4) 321 頁, S. 272
- (5) 323 頁, S. 275
- (6) 324 頁, S. 276
- (7) 326 頁, S. 279
- (8) 330 頁, S. 284
- (9) 331 頁, S. 284
- (10) 331 頁, S. 285
- (11) 332 頁, S. 286
- (12) 333 頁, S. 287
- (13) 334 頁, S. 288
- (14) 337 頁, S. 293
- (15) 338 頁, S. 293
- (16) 343 頁, S. 298
- (17) 344 頁, S. 299
- (18) 346 頁, S. 301
- (19) 351 頁, S. 307
- (20) 351 頁, S. 308
- (21) 352 頁, S. 309
- (22) 353 頁, S. 310
- (23) 359 頁, S. 317
- (24) 359 頁, S. 318
- (25) 360 頁, S. 319
- (26) 361 頁, S. 319
- (27) 361 頁, S. 320
- (28) 363 頁, S. 322
- (29) 363 頁, S. 323
- (30) 364 頁, S. 324
- (31) 365 頁, S. 324
- (32) 365 頁, S. 325
- (33) 366 頁, S. 326
- (34) 367 頁, S. 327
- (35) 368 頁, S. 328
- (36) 371 頁, S. 331
- (37) 371 頁, S. 332
- (38) 372 頁, S. 332
- (39) 374 頁, S. 334